し・み・ん発

shimin-hatsu@tokyo-np.co.jp

トモニ　カンガエル　ツナガル

米軍施設で自然保護

トモニ　**瀬谷環境ネット**　宮島行寿さん（69）

seyakankyo@nethome.ne.jp

米軍上瀬谷通信施設（横浜市瀬谷区、旭区）の日本への返還が今年六月末に予定される。返還後の跡地利用は未定だが開発が進む心配もある。ここで農業と自然保護に取り組む「瀬谷環境ネット」代表、宮島行寿さん（六九）＝横浜市瀬谷区＝は「田んぼにホタルが舞う原風景を取り戻したい」と、次世代に豊かな自然を残す願いを語る。（志村彰太）

みやじま・ゆきとし　1945年静岡県焼津市生まれ。高校卒業後に上京し、働きながら横浜国立大工学部（夜間課程）で学ぶ。30歳で横浜市立小学校の教員に。総合学習の時間に学校近くの森林で自然観察を教え、環境保護に関心を抱く。退職後の2006年に瀬谷環境ネットを設立し、農業や自然観察・保護活動をする。会員は70人。

上瀬谷通信施設は現在、軍事施設としての機能はありません。二百四十二㌶の敷地の半分を占める民有地は、農業のために入ることができます。施設内の田畑で活動し始めたのは六年前。渡り鳥のツグミを追っていたら、施設の方へ飛んでいった。警備員に怪しまれながらも双眼鏡を向けると、敷地内に農地が見えました。「ここを使いたい」と思っていたところ、数日後に地主に偶然出会い、事情を話すと「耕作放棄地だから管理を任せてもいい」と。以来、コメや季節の野菜を育て、田畑に来る生き物を記録しています。

開発が長く制限されていたのでホタルが出るかと思いましたが、残念ながらもういませんでした。ホタルは人間がある程度手を加えた自然環境に生息するので、コメの収穫期も水を抜かない農法で生息環境を整え、田んぼにヘイケボタルと餌となるカワニナを放ちました。ここにホタルが戻り、一年中、生物のにぎわいが実感できるようにしたいのです。

私が子どものころは、学校帰りに川や山に行って魚を捕まえたり、わき水をかぶって遊んだりしていました。わき水は夏は冷たいのに、冬はなぜか湯気が出るほど温かい。地球の大きさを体で感じましたが、いまの子どもたちは自然に触れる機会が少ない。小学校教員時代、総合学習の時間をめいっぱい使って、こうした「ワクワクする体験」を児童に伝えたいと思っていました。

二〇〇六年に退職したとき「教員を辞めたら関心を失っていいのか」と自問自答し、野鳥や植物に詳しい知人ら十四人を誘って「瀬谷環境ネット」を設立しました。まずは身の回りにどんな生物がいるのか観察してみると、サギやオオタカ、キジなど比較的珍しい鳥、サワガニやヤゴといったきれいな水にすむ水生生物がいました。瀬谷区には境川とその支流が複数あり、市が保護している森林もあって豊かな生態系が残っていることを再確認しました。ただ、観察だけでは活動に限界がある。田畑を使い、自然の循環を再現したいと考えるようになりました。

近隣の小学校は授業で田植えや収穫体験に来てくれます。どろんこ遊びを楽しみながら田んぼの感触を覚えてほしい。会員は子どもから七十代まで幅広く、河川の清掃や地域の祭りへの参加、タウン誌寄稿など活動の幅が広がっています。施設の返還後、活動の場がどうなるのか不安もありますが、できれば今の自然が残り、人間と自然の関わりを味わえる場所として受け継いでいきたい。教え子たちが会員として戻ってきてくれたらなとも思っています。

米軍施設内にある田んぼの手入れをする宮島さん（左から2人目）ら＝横浜市瀬谷区で

暮らしアイ

介護の現場を支える施設職員やホームヘルパー自身が高齢化し、〝老老介護〟が目立ってきた。賃金などの待遇改善がままならず、若い人材が集まりにくいことが主な理由だ。体力面の負担が大きい入浴介助などは難しいが、利用者にとっては同世代ならではの安心感があり、欠かせない戦力となっている。

高齢ヘルパーに安心感

北海道夕張市で特別養護老人ホームなどを運営する社会福祉法人清光園。職員百二十一人のうち二十二人が六十歳以上で、四人に一人を占める。七十代も五人いる。市によると、六十五歳以上の人口割合は47・57％（昨年末）で市としては全国で最も高い。「これだけ多いと、若い職員を集めること自体が難しい」と小田島英憲施設長は嘆く。

デイサービスでは、車いすの利用者をしばらく受け入れることができなかった。高齢の職員には、送迎車から車いすへの移動の手助けや、体を抱えたりする入浴介助が難しいからだ。

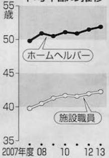
利用者の自宅に行く訪問介護サービスも深刻だ。東京都のＮＰＯ法人「サポートハウス年輪」では、ヘルパー一人が七十歳を機に退職。後任を補充できず、サービスの依頼を断らなければならないこともあった。安岡厚子理事長は「現場で中心的な役割を果たしてきた団塊の世代の女性たちはもうすぐ七十歳になり、引退の時期。若い人が来てくれない以上、このままがんばってもらうしかない」と苦しい実情を訴える。

介護労働安定センターの一三年度の調査によると、ヘルパーの平均年齢は五一・九歳で、六十歳以上の割合は〇七年度の19・6％から、一一年度には31・6％に上がった。

体力面の課題がある一方で、介護の質向上への期待は大きい。利用者から「共通の話題がある」「同世代として気軽に相談できる」などの点が歓迎されるからだ。

六十歳以上の人を介護現場に派遣する「かい援隊本部」（東京）の新川政信会長は「入浴介助などの力仕事ではなく、掃除などの補助的な仕事をしてもらっている。名脇役として活躍してほしい」と話している。

介護従事者の平均年齢の推移



※介護労働安定センター調べ